

自然とのふれあいが育てる子どもの力

～園庭遊びを通して保育士が語り合う～

○龍田千夏 田中麻衣(いこま乳児保育園)

I. はじめに

いこま乳児保育園が昭和 46 年に設立されて令和 3 年度には 50 周年を迎えようとしている。生駒山の中腹の自然に囲まれた環境のもと穏やかで温かな雰囲気の中で、たくさん子どもたちと過ごしてきた。設立当初から植えられたメタセコイヤの木が時代の流れをすべて見てきた唯一の存在と言っても過言ではない。しかし、園舎や遊具など子どもたちを取り巻く環境に合わせて変化していったものがある。

設立当初の園舎と園庭



冬のメタセコイヤ



このように変化していくものもあれば、ずっと変わらないものも存在している。それは、「自然の中で育つ」ということだ。保育園の年間目標でもある「うんとあそんで、もりもり食べて、ぐっすり眠って大きくなろう」にもあるように、室内だけではなく、わずかな時間でも戸外で遊ぶことを長年実践し続けてきた。今回は、四つ這いの 0 歳児の子どもでも安心して探索活動が出来る「園庭」に焦点を絞って子どもたちの姿や写真から何が育とうとしているのかを紐解いてみたいと思う。



図1: 1日の戸外で遊ぶ時間帯

1 日の戸外で遊ぶ時間帯は図 1 の斜線のように多い時で早朝や夕方も園庭に出て遊んでいる。

園庭には、タイヤの階段を登る築山があり、その下を大きなトンネルが通っている。砂場やブランコ、滑り台などの遊具があり、1年を通して畑や花壇で植物に触れることができる。(図2、3、4)

このような環境の中で子どもたちがどのように過ごしているか着目した。

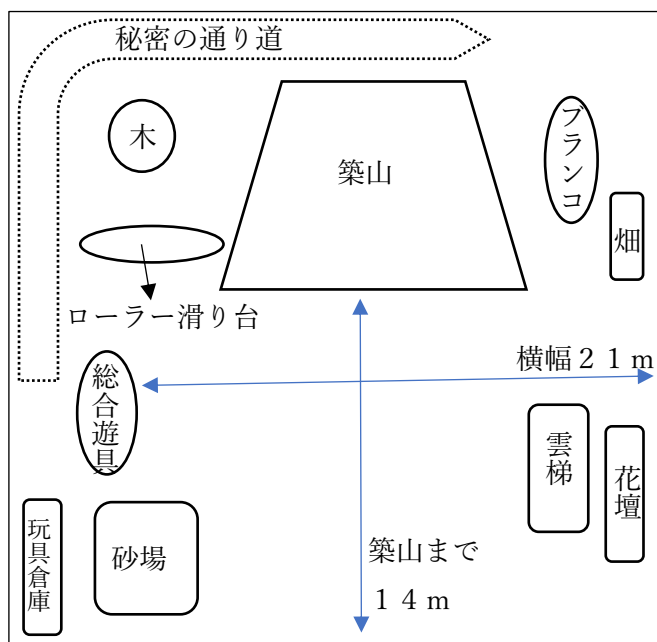


図2: 園庭の広さ

横幅大人 24 歩 1 歳児約 47 歩
築山まで大人 15 歩 0 歳児約 65 歩



図3: タイヤの高さ

1 段 約 18 c m



図4: トンネルの高さ

約 80 c m

II. 研究方法

- 園庭で遊ぶ様子の事例を挙げる
- 事例の写真から読み取れる子どもの姿や気持ちを付箋で書き出す
- 付箋を項目に分類する (K J 法)

a) 園庭であそぶ子どもの姿から読み取る

事例 1

0 歳児「おいでおいで」

4 月当初、A くんは保育士と一緒に築山に登るという経験をした。後日 B くんが築山に登っているときに保育士が A くんを誘いかけると登りだす。B くんも保育士の声掛けを聞き A くんが来ていることを認識すると少し待って、一緒に登り始める。



A くんは安心できる大人と一緒に登る経験をしていたので登り方を学び自信をつけていた。友だちが登っている姿を認識したタイミングで保育士からの言葉がけがあり、興味や意欲をもって一緒に登って喜びや嬉しさを共有した。

事例 2

1 歳児「勇気を出して」

ある雨上がりの日、園庭に大きな水たまりができる。C くんは水たまりに入ってダイナミックに遊ぶ友だちの姿を少し離れた

ところで見つめていたが、保育士に誘われると離れて行ってしまふ。しばらくするとまた戻ってきて見つめている。



園庭の人数が少なくなってくるとそっと近づいてきてゆっくり足を動かして入っていく。Cくんの視線を感じた保育士が「いいよ」というと、両足で入って顔を上げてこちらを見る。「じゃぼんしたね」と声をかけると自分の足元をじーっと見つめて少し足を動かした後、出てきて走り去る。



新入児のCくんにとっては大きい水たまりを見たのも初めてかもしれない。やってみたい気持ちはあるが、なかなか踏み出せない。自分もできるかなと葛藤した様子や、表情からは驚きや達成感が読み取れる。本来ならば危ないから埋めてしまおうとする大きな穴も、保育士が見守ることで安心して遊べる環境になる。

事例3 2歳児「おもしろいを追求する」

園庭の畑でトマトを育て、保育士と一緒にバケツに収穫していた。後日園庭に出ると、保育士に「バケツとって」と言って受け取り自ら畑に向かう。「これ赤いなあ」「もう食べれるなあ」、「こっちにもある」「ちょっとまだあおいな」とトマトについて相談しながら、一人がとりすぎることもなく収穫している。



別の場所では、プランターを動かしてダンゴムシやミミズを探したり、カマキリ、キリギリス、セミの抜け殻を見つけたりしている。保育士が「虫かご持ってきて」と話すと急いでテラスから自分のクラスに戻り虫かごを取りに行く。

「トマト食べるかなあ」と、見つけた緑のトマトを入れて観察する。



これまでに経験したことから考えて、
思いを共有し、困ったときは助けを呼びつ
つ保育士を介さずにあそびが展開していく
ことがわかる。

身の回りの物事や友だちへの理解や関心、
言葉でのコミュニケーション能力が高まり
相手を思いやる気持ちも芽生えている。

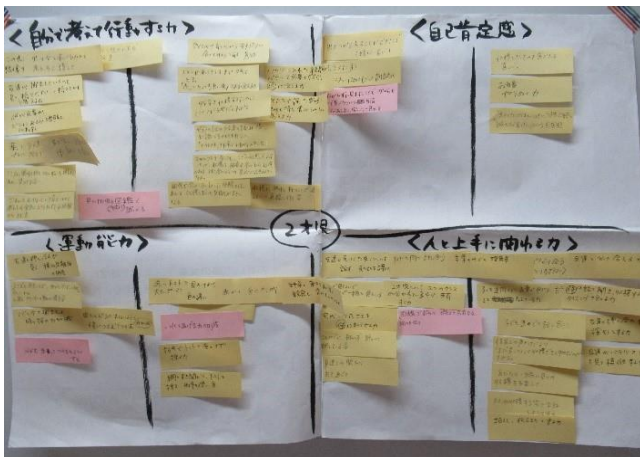
保育士は、追求し探求する姿を見守り、
さりげなく小道具を加えたり、子どもの気
づきを一緒に楽しんだりしている。

b)子どもの姿や思いを書き出す

各学年で集まり、写真を見ながら考察を
行った。その内容を持ち寄り話し合う中で
もう少し理解を深め、具体的にどんな育ち
につながっているのかを知りたい、と模索
していたところ、園の方針に似た文献に出
会った。

それぞれの事例から見えてきた姿を、参
考文献(4つの力)^{※1}をもとに分類する。

c)書き出した姿を分類する



0歳児

《自己肯定感》

- ・先生と一緒に（真似をして）登りたい
- ・一人で登れた

《人と上手に関わる力》

- ・担任でない保育士とも達成感を持つ
- ・友だちが後ろから来ている姿を見て待つ
ている
- ・保育士が友だちの存在を伝えることによ
り気づく
- ・友だちと発見を共有する
- ・楽しい嬉しい気持ちを表現する

《自分で考えて行動する力》

- ・友だちが登っている姿を見て自分も登ろ
うとする
- ・興味のあるものを見つけて観察する

《体力・運動能力》

- ・登るための手足の動かし方を知る、試す

1歳児

《自己肯定感》

- ・水たまりに触れられたことを喜ぶ

《人と上手に関わる力》

- ・友だちが水たまりで遊ぶ様子を見る

《自分で考えて行動する力》

- ・「何かな」「やってみようかな」と興味を
持つ

- ・保育士の模倣をしてみようとする

- ・水たまりに足をいれてみる

《体力・運動能力》

- ・水たまりに片足をゆっくり入れる

- ・水遊びは好き

※1 参考文献参照

2歳児

《自己肯定感》

- ・ 友だち・保育士からできたことを褒めてもらう
- ・ できなかったことができた
- ・ 虫を怖いと思いながら捕まえることができた

《人と上手に関わる力》

- ・ 指差しで伝えようとする
- ・ 友だちと感じたこと、見たことを言葉で共有する
- ・ 見つけたものを保育士に知らせる
- ・ 友だちとの距離感を把握し一緒に観察できる
- ・ 友だちと分け合える
- ・ 収穫できたことを喜び合う

《自分で考えて行動する力》

- ・ 虫は何を食べるか想像し図鑑で調べる
- ・ 保育士、友だちの行動を見て模倣する
- ・ 虫を捕まえるために、収穫するために何が必要かを考え準備する
- ・ 自分たちで育てて収穫したから食べてみようとする
- ・ 収穫できる時期かを見て判断する

《体力・運動能力》

- ・ 友だちと押し合うことなくいる
- ・ 虫探しでプランターをよける
- ・ 虫を捕まえる指の力加減
- ・ かがむ、走り追いかける
- ・ 色の違い、変化を見分ける
- ・ 網からトマトを収穫する両手の使い方



Ⅲ. 結果

- ・ 0歳児は保育士の援助を得て、1歳児は保育士の見守りや確認を得て、2歳児は経験や共感を得て力を身につけているとわかった。
- ・ 写真を題材にしたことでイメージがわきやすかった。
- ・ 中には項目に分けようとするとう重なってしまう部分もあり難しいこともあった。
- ・ 園庭の環境作りを意識するようになった。
- ・ 新人職員や異動職員と共通理解ができた。

T先生

一人一人をよく見て、担任だけでなく他のクラスの先生とも話し合い、いろいろな見方を知ることが出来てよかった。

H先生

1つの場面を切り取って話し合うことができてよかった。自分で気づけない視点を知り、見守る大切さに気付いた。

- ・ 普段何気なく見ている園庭での子どもの姿を皆で振り返って話し、新たな発見や子どもの思いに気づくことができた。
- ・ 4つの力を意識したことで、生きるために必要な力が育っていることに気づけた。

Ⅳ. まとめと今後の課題

今回の研究を通して同じ環境で遊んでいても子どもにとって学び方は様々であることが分かった。また、自分たちの保育の振り返りを行うことで子どもたちを捉える視点を共有することができ、保育士間の連携につながっている。大切なことは園庭で遊ぶ時間を保障し、クラスだけではなくみんなで見守るという感覚を持つこと、そして保護者の方と普段の姿を伝えあい喜び合うことで共に見守ることになると改めて認識

した。今後の課題として、園庭で遊ぶ一人一人への配慮・援助をより一層心がけ、日頃から子ども姿を報告したり語り合ったりする機会を増やしていきたい。

50年の間、「自然の中で共に育つ」というスタンスを保ち続けてきた。保育士が見守る中で、子ども一人一人が安心して心地よくのびやかに自分を発揮できる場所があることに私たちは感謝している。

参考文献

※「自然と友達に」

あそびと環境0・1・2歳

2019年10月号特集 P6~7

《自然とのふれあいが育てる子どもの力》

① 自己肯定感

自己肯定感は、「最後までやり抜く忍耐力」や「気持ちをコントロールする力」などの非認知能力の土台となり、0, 1, 2歳児期に育むことが大切。自然の中で、子ども一人一人が自分のやりたいことを思う存分やりきる体験は、「自分は自分のままで大丈夫」「自分は愛される存在だ」という気持ちを育む。

② 人と上手にかかわる力

自然の中では、新しい発見を喜び合ったり、あそびのイメージを共有したり、友達を助けたりする場面がたくさんある。そういった経験を通して、子どもたちは人とかかわることの楽しさを味わい、同

時に相手を思いやる心や対話する力を育んでいく。自然の中でのびのび遊んでいるだけで、大人が教えなくても、転んだ子に手を差し伸べたり、なぐさめたり、困っている子を助けようとする姿が見られるようになる。

③ 自分で考えて、行動する力

おもちゃや遊具のない自然環境で、子どもたちは自分が興味のある物を発見し試したり、新しいあそびを創り出したり、自分が楽しむ方法を主体的にみつけていく。その中で、思考力や創造力、行動力が育まれる。また、そのときどきで変化する自然環境とかかわる中で、判断力も培われる。例えば、暑さ・寒さに合わせて着る物を調節することや、着替えがないときは汚れないように気を付けたりすることもできるようになる。自然体験は、子どもたちの「自分で考えて、行動する力」を育むのだ。

④ 体力・運動能力

「現在の5歳児の運動能力は25年前の3歳児とほぼ同じ」と言われている。何もなかったころで転ぶなど、体をうまくコントロールできない子どもが増えている。小さいうちから体を動かす楽しさを味わい、習慣にしておくことが大切。特に自然の環境には、人工物にはない不規則な凸凹の地面や傾斜があり、その中で自由に体を動かすことが、平衡感覚や柔軟性など、体を上手にコントロールする力を養う。